

ざやかに申さるゝ物に候哉。それは申合せ、上をそと引きたる疵也と、はや合点したるにこそ。よく如此事に心を付よとの御意にて、我を折りたるかと御笑被遊、因幡が申しても、外に奇妙は少もなきぞ。おなじ人間じやぞ。心をつくるとうかかると見るとの違ひじやぞと御意被遊、御機嫌の御容子にて、同類三人共に生胴にせよと被仰出たりと、亡父瀬兵衛申出。とあり。右年曆は詳かならず。按ずるに、湯淺祇庸の藩國官職通考に、公事場奉行、いにしへは常に年寄衆出席ありしと聞ゆ。微妙公の時、卯辰某院の小僧住持を殺害しける處、篠原出羽守是を斷ずる事見たりと載せたり。右は前顯の傳話を誤りたるなるべし。

○末廣町

此の町名は古名にあらず。慶應三年五月より、卯辰山の嶺上を平均して、市塵を建築す。故に明治三年七月更に町名を立て、東御影町等の町名を設けし時、此の地邊をば末廣町の嘉名を以て名付けたり。

○山之尾料理店

此の料理店は、磯部屋とも呼べり。此の地邊は卯辰山の山

尾なるが故に、山之尾と號すと。金澤市中料理店多き中にも、山之尾は古く其の名をかゞやかせり。

○摩利支天山寶泉坊

眞言宗也。三箇屋版六用集に、寶泉坊地福院。とありて、摩利支天の別當なり。貞享二年の由來書に、慶長六年卯辰山に於て寺地拜領、同十一年富田越後守摩利支天堂建立、當寺をば別當に相立。とあり。天保十四年四月初日、自火にて寺院悉く燒亡。此時寺中傳來の古書・古文書類燒失して、往昔の事知らずといへり。さて右燒亡後は再建なく、僅に草堂を造立するのみ。

○摩利支天堂

寶泉坊由來書に、慶長十一年に富田越後守摩利支天堂造立。とあり。或は云ふ。此の摩利支天は、越後守重政金澤城内越後屋敷に居住の頃、彼の邸内に安置せし尊像なりといへり。三州名跡誌に云ふ。越後屋敷内空地に、岩時鳥と云ふ石あり。此の石は富田越後居住の時、摩利支天堂の下に有りし石也と云傳へ也。と見ゆ、金城深秘錄には、越後屋敷の子規石は、富田越後守信仰の摩利支天の堂跡の遺蹟

を残せし石ならんか。此の石をいらへば風雨起ると云傳ふ。

とあり。按ずるに、三壺記に云ふ、摩利支天は梵語なり。翻譯して陽炎と訓す。摩利支天經に曰く、佛言。有菩薩名摩利支。恒行日月之前。日月之不能得見。亦不能提。不能禁縛文。又金光明經曰。鬼神品内云。能令有情隱身於路。或水火王難盜賊軍陣皆可隱身令不得使云々。如斯故に、兵法の家には必ず摩利支天を信用するなり。因茲富田越後は、兵法を我が物とせし故に、愛宕の傍に、利常卿の御下知にて、摩利支天の堂を建立せしなりとあり。

○五本松

此の松は摩利支天堂の前にあり。一本松に次ぎたる大樹にて、其性于今盛んなり。此の松を世人五本松と稱すれど、五保松なり。昔より一本松・五本松とて、卯辰山の名木なり。此の木の下より眺望するに、市中を眼下に見渡し、其の景色實に宜しきゆゑに、春季の頃など殊に眺望人多しといへり、梅望句集に云ふ。ひと日故郷の卯辰山にのぼりて、金陵を望めば、佳氣城市にみち、人煙のにきはひ、そのかみに倍せりとおぼえて。

屋の棟にそうて植ゑけりうめ柳

○五本松怪異傳話

世人の傳説に、摩利支天堂の五本松は、昔より天狗の住所にて、折々怪異あり。故に夜中などは、此の堂前へ參拜人甚だ恐怖して、多分往くものなしといへり。綿津屋政右衛門の、金澤俳優傳記に云ふ。堀昌安、犀川の下に昌安町とて町家を建て、あから庄之助と申す劍術者稽古所を構へ、町々より大勢稽古に參り、政右衛門以下七人庄之助より免狀を請け、萬事相濟候て、卯辰寶泉坊の摩利支天へ夜中七つ時七人諸共參詣いたしける處、右御堂おしつぶれ、その音影しく、我々も飛出し、跡をも見ずして馳かへり、翌朝かしこへ往きて見候處、何事もこれなくて元の通りの御堂也。これこそ摩利支天の御こゝろみにあらんとぞんじ候。不審のあまり、こゝに記し置候。とあり。此の外五本松にての怪異靈驗等の傳話種々ありといへども、今爰に記載せず。

○摩利支天山

摩利支天堂の高なる山を呼べり。此は卯辰山の小名にて、